

ハステッド倫理的決定モデルを適用

筆者は、長く看護管理者を務めました
が、「倫理」というと正直、苦手意識が
ありました。それは、臨床で悩んだ経験が
ずいぶんあるからです。

1986年に私は、新設の脳神経外科病
棟で初めて看護師長になりました。ある
とき、「患者は脳死状態である」という担
当医の説明場面に同席していました。医
師から説明があると同時に、ご家族は私
に向かって「師長さん、それならば呼吸
器を外してもらったほうがいいでしょ
うか」と言われたのです。私はそのとき、
師長という役割の重大さに打ちのめされ、
「人の命とは、生きるとは何だろう。患
者さんにとってよいこと、ご家族にとっ
ては何がよいことなのか」と自問し続け
ました。後に、その答えを求めて哲学を
学ぶことになりました。さらに、看護部
長として、例えば、倫理的ジレンマ事例
を各病棟から出してもらうと、そのほと
んどが患者の行動制限のことになってし
まう、カンファレンスしようにもどのよ
うに進めていいのかわからない、たとえ
進められたとしても、その決定が正当な
のかどうか誰もわからない……。

本書は、そのような問題をハステッド
倫理的決定モデル(以下、モデル)の適用に
よって、コンテキストに合致した倫理的
決定ができる指針を示しています。

モデルではまず、看護師と患者との合
意が、看護師の倫理的決定への第一歩と
され、それが倫理的決定を正当づけるこ
とを再確認させてくれます。

次に、6つの行為規範「自律」「自由」
「プライバシー」「忠実」「善行」「誠実」が基
本におかれており、看護師が倫理的ジレ
ンマに陥ったとき、自分なりの答えに行

き着くために有用です。なかでも、患者
の個性を受け入れる「自律」の大切さが示
され、単なる勘や経験則を頼りに複雑な
ジレンマを解決しようとするのは許しが
たい誤りであるとし、モデルの適用を強
調しています。

次に重要なこととして、効果的な倫理
的決定をするには、認識のコンテキスト
に状況のコンテキストを織り込むことが
挙げられています。認識のコンテキスト
は物事の知識であり、状況のコンテキ
ストはジレンマを感じたときの具体的な状
況です。この2つがあって初めてジレン
マを感じた事例が鮮明になり、倫理的決
定が正当づけられるのです。ここで取り
上げられた事例は、じつはこれまで自ら
も体験し悩まされた事例と根本は同じで
あることを教えてください。さらに、60
近くある事例ごとに、モデルにもとづい
て丁寧に検討されているため、倫理的決
定への理解を深めることができます。

倫理的ジレンマから問われる看護

ジレンマとして取り上げられた事例以
外にも、ビートルズなど身近に感じるも
のからアリストテレス以後のさまざまな
分野の理論が織り交ぜられ、読者をいつ
の間にか深いレベルの倫理的思考へと誘
ってくれます。さらに、監訳者による「本
書を読まれる方へ」は、モデルの理解を
助けてくれる内容となっており、また参
考文献に邦訳文献が掲載されているので、
今後の学びへ展開できる助けとなります。

さらに、看護とは何かを問われる部分が
随所にあり、看護学生や新人看護師にぜ
ひ読んでもらいたいと思います。私自身
も教育現場に移り、いままで経験した倫
理的ジレンマをもう一度このモデルにも
とづいて見直してみようと考えています。

認識と状況のコンテキストを 織り込んだ倫理的決定

原田博子 九州大学医学研究院保健学部門准教授



臨床実践のための 看護倫理

倫理的意決定へのアプローチ

グラディス L. ハステッド, ジェ
ームス H. ハステッド 著
藤村龍子, 樽井正義 監訳
定価 3990 円
(本体 3800 円 + 税 5%)
医学書院
TEL. 03-3817-5657

評
BOOK